

描々道人稿
鋸山玉石異訓
初編上

同丈記操觚



客歳の晩夏猫々道人魯翁曾て節と房總二州に曳き暑と鋸山の靈場よ
 避るの日偶然一樵夫より聽得此物語り其趣意克く勸懲の道小
 愜ひ且近世の一奇談あるのうろ魯翁遂に帰京の後至石異聞の名と
 設けて伊呂波紙上より号と嗣ぎ陸續登錄せられも八十回の長き不至り
 其稿未だ全くねと猶看客の易采に愈高々響より書肆の主個勸文
 堂と小冊稗史よのせんと屢魯翁に請ふ折々魯翁机邊の筆劇を
 餘り即ち近生よあれと托と探舩め初編の一帙素来本記の抜萃よて亭
 愚衷と交へされば標題も其儘一字と換へ玉石異訓と斯の号けり

明治十五年十二月

岡丈紀識



居山日記

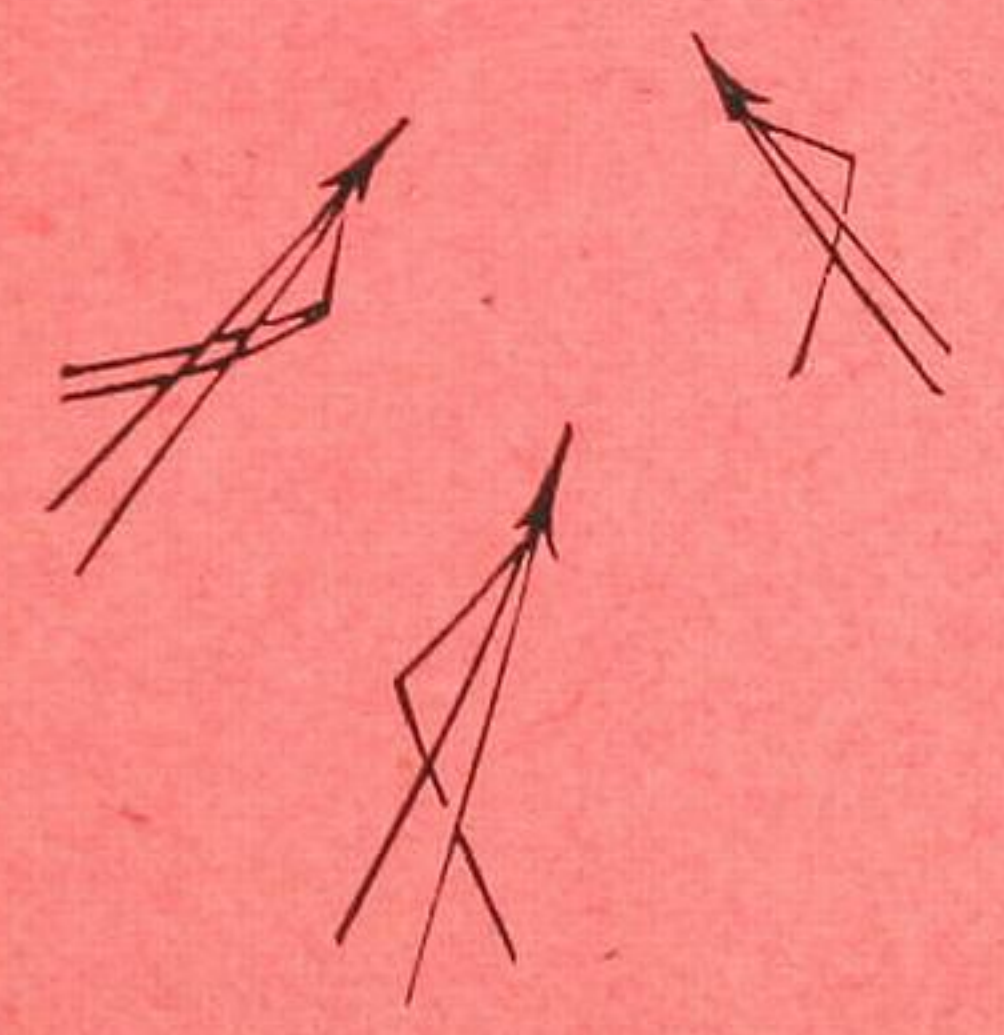
子あはれ

やまざり

あはれ

く

勤文を



浜山切止

幸藏その子分
新堀村の賭場にて
捕縛せらる



長我部
幸藏



金山

半次郎新
堀村の騒ぎ
と逃げ両刀
を捨て勝
と共に逃る



鋸山玉石異訓初編卷上

東京

猫々道人原稿
岡 犬紀操觚

○第一回

抑安房の國平郡保田の郷元名村ある鋸山へ神龜元
年行基菩薩の草創する人蹟道を開き一以降茲より千
二百餘年連峯裁くとして鋸の崖を送たるよ勢布
たり故小里候まよと擬へてその山名を稱号より又此

山の巖石の自然佛体名默の形象とるま事恰も人
 造の巧とるよ異ふね真寶よ身異の靈森あり
 とて安永年中日本禪寺の住僧高山帰依の信者よ効
 める石像の羅漢教体と寄附せしむるよ安政の末も
 まて經歷九十餘年間久く山中の岩窟の中よ安永
 一たる佛像の負救の一千二百餘体よそれど控年と
 經る石像のほ者まんだの缺たるを新刻石通よ造刻
 め再建する者多き中よ上総の國養原上町の石通

天城民衆とりける者その生國ハ伊豆の玉清教の石工の
 一男よて幼年時より父よ習ひ業と文嗣き終日言山
 嶽の危険事業よに棚せしぐその年齢二十一二の頃
 終よ繫ぐ魂の緒成刻むよ等しに活業の最怖し
 と是るよう迎属父母も世と去て同胞とてゆめぬ
 此の心中安しと僅少の地所親戚に付託したる
 の知己と便りつと總の養原よ給辨来とと渠者
 よ此地とあり地圖よ行しとまきくものく今ハ此

活計の方便なれば石鑿の鑿たる業りて那首迄
 首と多間取や成索まうち當所の石通款系ふ七が
 大石塔の文員よその職工と需むるより本賃宿の金
 個が活しと関くと著しく妨ねられ儲徳と自身の
 上の所周あたを憑とて是より與七が作し産は且
 暮織業の間帳も毛庖厨と採らた炊きと助け第
 身よ心と用ゆるよその妻か務め氣よ極ひ文員半業
 の果たる後もか務が推挙よよく首尾よく身子同

撰よ仕へしと逸一年と過まをよま至個與七の氏務
 が最老実ある心中と感一碑の精力と憑みける
 然るよ與七の先妻よ玉吉とりよ一遺児あり年甫又
 歳の所その妻身取り後の妻と近するよ継ふあり
 てハ支拂中の睦しうぬ基ひなれば一先か足成
 里児よおまを家事の和熟可らんめれと他人
 の勤めよ玉吉と同國富津の浦色るる漁所の津
 よ里児よおしを後か務と迎へ娶り後妻となしよ

するに即ち安設又年の春もく過時興七の二十六業
 か勝ハ二十五六歳ありとぞ抑此か勝とり入るにその似
 茶江戸新搦金六所四名里後二修樂もて之筋の糸よせと
 渡る藝妓營業の極那者あり一が夕顔粧ふ庭夜出
 もその月くのかけ流一定めか採たる客の中よ上総
 色へんの納えとりもて武藏屋幸茂とくくる者よ芝口色
 の割烹樓うらふ六夜聘るるよかの幸藏が挙動上
 総祇りの控扱へおとど衣服の裝飾懐中物もぞ仍

涉りたる贅淨好と纏頭の黄金も平凡の寄と優りて
 造ひ一へ傾き易き淫ひ女の浮たつ思ひよ偽引
 水みづのなみもやらで打解一その夜と初め翌日も遠
 出退中と揚格よ心中の真実と何う一つか務へ是
 張老母ふも告ての後の活一今よ幸茂が出舟中へ
 毎月歳千欣雜費と出してか務が件と寄宿と定
 め爾東江戸よ出る宿あり必此家よ止宿り一が
 お勝も好と幸茂の助援もありて活計ののう自

僱勤の藝妓縁ぎよ忌極々酒席へ強て謝辭り返る
 更さへ多うもよかの華務が中へ他の客の聘ぎ
 へ後せむ務を自由の見做し氣儘のか務と緯号
 も高く一年版りと過まらち老母も迎當身故りそ
 憑ととなんんき親屬もなぐればか務へ一箇も幸
 務と自己が所丈と思ひ詰め今ハ藝妓の營業も相
 尋く寧を上條の果ふも何と此身と故郷へ連行て糸
 操漁りの業ありともを慣へ後へあうぬ交へ何るま

トまよと幸務よ屢に解き通るゆを然るハ藝妓の
 營業と度めは住居と賣拂ひと上條へ伴ひゆにれ
 ど我家よ本妻われハ其迹をよ別家と遠りき如
 和女と住いませんと相談爰よ怒ひて安返二年の十
 月初旬終る居別へ住所と離れ懇意の方へもそれ
 ぐよ告別して小綱町ある末更津海岸より疾船
 よ糸込と上條の地方よ出帆せしが順風都合さん最
 よくてその翌朝末更津の濱をよ船の表くや吾幸

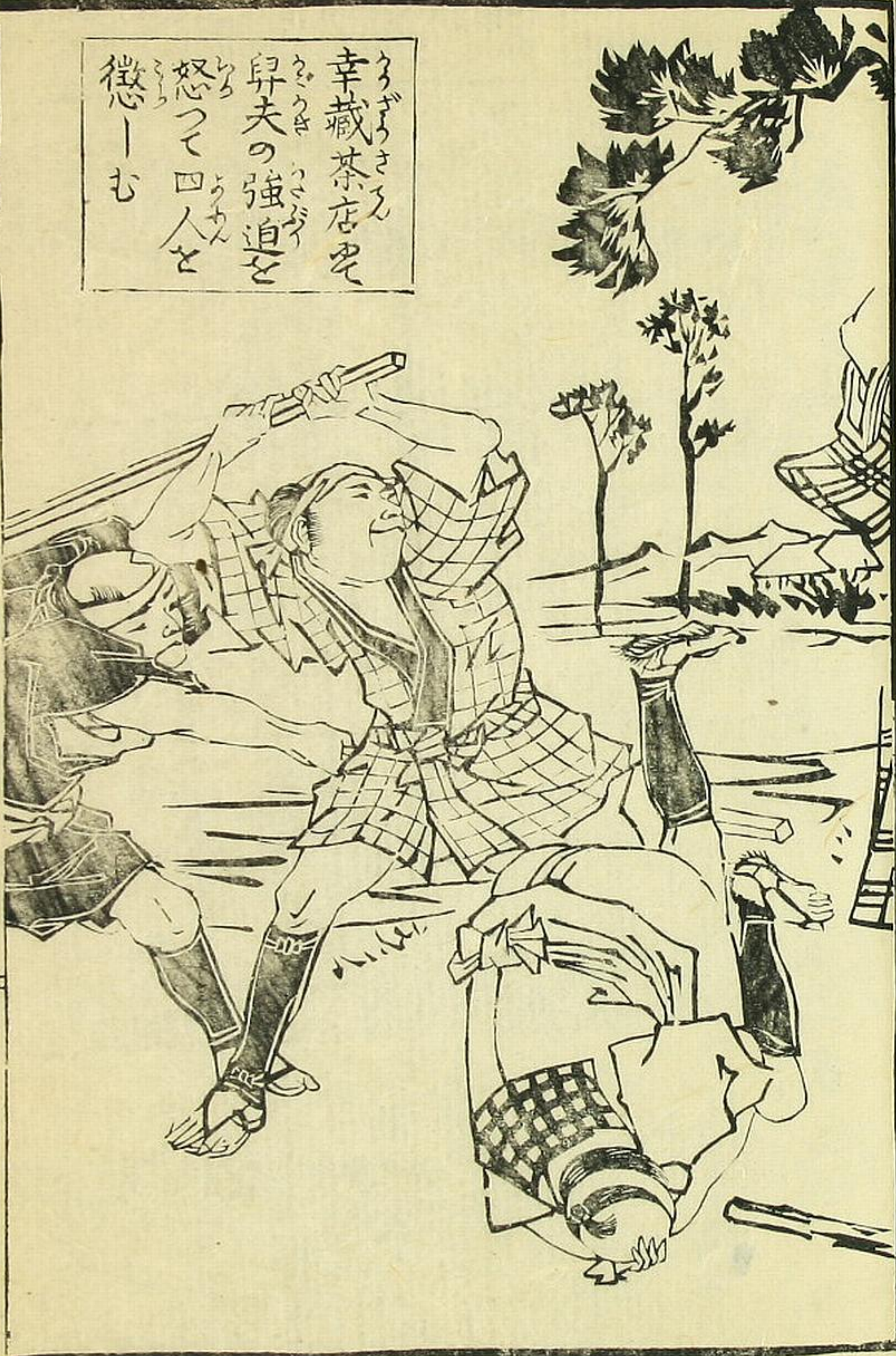
居一四六

編二

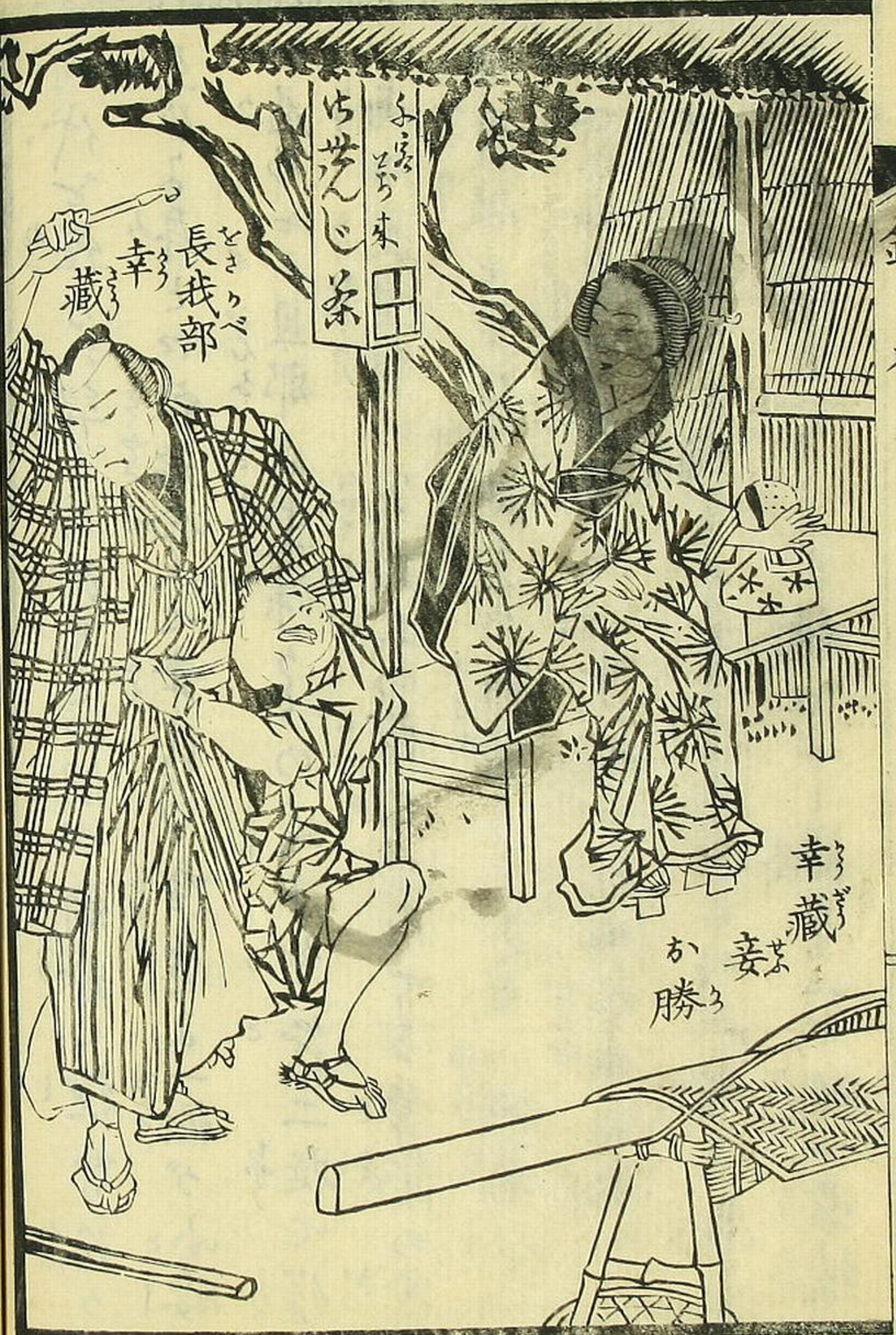
秀ひさのかつら猪とと連つらぞら陸とよりあ所まちよい出いで或あ旅ち籠ご屋や
 志いをい想いひこ朝あ膳さの支し度どと整とへと此こ知ちより二に挺てい
 の駕か籠ごと雇やとひ中ちゆうの一ひと夜よ途とちゆう中ちゆう又また宿やどりて同どう小せうの山やま
 色いろ那なとるとる頂ちゆう路ろの傍かたへの立た場ば茶ちや店てん又また昇のぼ丈さ等らが
 息いき杖づえと休やすめて汗あせと拭ぬふもぞ幸さい翁ごうか猪とも等ら籠ごと
 たち出いで等ひとしく茶ちや店てん又また腰こしうち敷ふけ烟えん草そう葉えつらま
 身みの衣い装まう那な那なめく婦と女によの道みち連づい尋たづ常じょうの丈さ婦ふの
 旅たびありぞ江戸えど風ふう俗じやくの團だん扇せんう藝げい妓ぎ腕うで腕うでりと足あしうけと山やま

酒さけ代しろを徑かぢるら六む昇しやう丈さの附つ目めと二に個こが偷と眠みんと視しちちりり
 互たがひひ身みと口くち私し語ご合あひひて幸さい翁ごうの座ざをを一ひと個こが小こ腰こし
 を屈かめめモシ且かつ那な本ほん更さら津つううの通と一ひと等ら二に挺てい七しち挺てい
 一ひと兩りやうの支し負ふ賃ちんの定ぢやう得とく意いの旅りやく店てんへたたてる營えい業ぎやうの衣ぎ
 理り直ちやく服ふくどどけけハ池いけををの服ふく徳とくよよくも一ひと個こ茶ちや金きん一ひと
 分ぶんででハ女によ房ぶどうや孩が児この口くちが糊まされれぬ何なん卒そつ日じつ個こへ一ひと
 分ぶんで酒さけ代しろをか頼たのむむまをを一ひとままははととの尻しつ尾び又また属ぞくと
 猪とりの之この個こも等ひとしく袴はかまとときき添そとと一ひとッつ如ごとくく如ごとくく如ごとくく

幸藏茶店を
 昇夫の強道を
 怒つて四人を
 懲一む



居山切上



金山一

長我部
 幸藏

幸藏
 お妻
 勝

且バ幸翁侍への灰吹は煙管の火皿と擬と亦ちこ
 壯史先旅宿うら定めと等翁僕と途中で煙る代
 と同ト壺瓶へ醜へ頼預自己も上総が生園で高賣用
 のの戸通ひは年中從來ふ此街道等翁僕の外酒
 代と出まへ云むと此方も知つておるが裁程うら
 とそ方うらと切られと例へのお人役令婦人と連
 やうが遊人と怖がる亡命や相札を者の旅でいお
 先と急ぐぬ日又里の路程此處うら下て歩ゆても大

ト事へ移るが其代り此場の始末と本更津の旅宿へ嚴く
 終どと等と駕籠に入まると翁物と死出し再び
 登たけをひきたるを昇史共の多勢と憑こふ衆に
 罵罵の男女と中よあつ取巻た喧嘩おけの撥
 藉よ幸翁最たる堪へうぬ然たる床札と湯と立
 上り煙管の雁首ふて一個の昇史の肩間を確と
 撲付れば汗と叫びく顔と壓へ退く背後より三個
 が同業の仇覚えてあよと各自息杖をよ振あげ

二、世に打ちけたり、尚、幸哉、思ふやう、敵をいそ、逢
き、昇、支、の、四、個、は、味、方、へ、唯、一、個、殊、は、婦、人、の、足、を、纏、ひ
尋、常、な、て、い、防、ぐ、は、難、し、と、腰、に、帯、た、る、銅、環、造、の、中
刀、と、ま、り、り、と、引、抜、き、競、ふ、て、打、込、む、息、杖、の、中、心、張、両
断、り、切、落、し、餘、る、又、頭、が、一、個、の、昇、支、の、肩、に、障、り、く
為、傷、と、負、い、ま、よ、云、甲、斐、も、あ、た、昇、支、共、い、流、る、鮮、血
は、驚、き、慌、忙、に、駕、籠、う、ち、棄、て、我、先、と、足、と、え、り、り、は、適
亡、り、至、此、折、か、務、い、茶、店、の、老、嫗、と、共、に、避、た、る、林、の、蔭

よ、身、を、戦、慄、し、て、居、た、り、一、が、斯、と、見、る、よ、り、立、戻、り、先
幸、哉、が、恙、あ、た、身、を、祝、し、つ、り、る、や、り、波、収、等、多、く、の
黨、と、集、へ、く、今、仇、報、よ、来、る、も、あ、れ、絲、は、疾、く、此、処、と
退、ま、て、喧、嘩、の、聲、と、避、け、ぬ、と、か、務、が、勤、め、よ、幸、哉、も
實、は、道、理、と、心、中、に、黙、頭、や、ぐ、て、数、千、餘、懐、中、より、柔
代、と、出、し、て、老、嫗、と、喚、へ、自、ら、り、裏、を、肩、よ、り、ち、懸、け
是、よ、り、幸、哉、が、猪、の、二、個、は、足、と、早、め、て、漸、と、半、里、隔、り
の、道、程、と、山、を、村、を、越、ゆ、く、知、色、の、家、を、訪、ふ、折、り、も

最希遁亡たる昇夫共へを負と猶一之個が再び得物
 とて引提げ男女の跡と追奉りて高家の門よたち
 誇り疵傷と負ひたる同業の者の仇の旅人外に
 出よと聞く騒動と主個が因付け奥の方より立出
 るがう今幸哉とち猶の二個は挨拶するも緯急る
 とは唯睥睨し打視やりて戶外に馳出し昇夫共がその
 狼籍と止んとまるよ一個はかみさる如己の者と思し
 く声とりけ雅りと思へば本更津の仁右衛門あるり顯相

愛へ同業と集へる自己が家の来客よ喧嘩と志
 うけりし如何しと理由に落着いて活せむ悪くは扱
 うぬと云はる仁右衛門の衣拭とりて背後
 なる二個の同業よりち對ひ勅次も毒助も未と
 知りぬり此か人の安房上総よ名も言ひ賭博共の
 親分株金器の島あや布といふか方寧美字と適宜
 ろうよか委注まをまが此方も僥倖な極といふ
 ろと互ひの點頭緒その始末は箇換くと駕籠續

酒代と出まおさぬ喧嘩募りて旅人が一個の同業
重吉の肩先は疵傷を負せまう前より此筋の眉
間と煙管で撲破らば是の通り血塗れの遺恨の
仇と報さんと跡を隠し南家が親分の住居との夏
さうさうぬ狼藉の害免めんと仁右衛門をとり二個由
等しくうち謝辞するよ急ぎ弟の妻細成はきき重吉と
やらが疵傷の元より筋次が怪我の療治料も喧げま
へと兼焼ぐれば仁右衛門足下は迷惑の微塵も灰け

ぬく此村外はの安縁宿茶屋で暫時休せられと通
金谷の一云よそんなら親分頼と外と初めの焼ひ何
ぞへやら濁て二個の昇ま女へ等しくうち連れ村外
はる茶屋の縁泊もぞ熱死する

○第二回

當時三個の島又弟の昇ま女が去り旅者送りて
幸哉とか務の二個と奥間へ送へ子分と思へた者よ
吩咐茶を勧め點心を出して茶煮るがう一別以来の

口煙を演べさすて貴兄あへ婦人と連て何事よりの為
 新どと同是て幸哉莞爾と笑ひ隣て湧たる縁は
 兄弟分の厄女よありて今更大人あはれ我々の縁を
 面目もこれと昇更共が婦女連と侮蔑をだての強
 迫が痛は障りて又物三昧彼令を宿の者あを何は
 渠等よ疵傷を負せしうへの利と犯し臨身身の過
 ちその業用の歳干でも適宜やう興へく内海を輕
 むとりよよ急め弟由委細を水爆この緯の急悪まで

いえどくくも我々の寓舎よ道場所と止めく二
 個の子分と引連是かの昇更等が宿り居る榮を
 きしき出たり跡よお務の急め弟の尚書と書し幸哉
 が膝の急めりよきし寄るがう声と激めて向ひくる
 やう今改めて因でいなれど且恥の上総の綱元と
 水知し身の上と客子の變つと此場の仕後との
 全個の衰産道家のよの形取と急せしふその形取
 が兄弟分と且恥をきしてりふくくは若哉貴弟由か

同業の肩書うまのうまのうまのうまか方かででいい何何ううざりざりううとと星星と
 指さたりりかか務務がが穉穉よよ幸幸務務のの冷冷笑笑ひひてて縊縊ささてて車車一一
 附つくく烟煙草草とと一一口口吸吸ひひつつオオ、能無無察察ししとと响响のの身身のの上上綱綱
 元元株株のの親親父父のの代代上上總總生生れれのの活活動動由由孩孩児児のの所所よりより務務
 負ふ好好漢漢色色のの砂砂のの穴穴布布うう陸陸のの畠畠のの小小丁丁半半親親父父のの
 令ま我我盗盗出出一一市市場場博博奕奕のの盆盆蓋蓋よよ野野田田務務負負がが身身のの強強
 りり逆逆ままのの種種のの幼幼畜畜一一けけ者者陸陸田田りりやや上上妙妙のの長長根根差差のの
 紋ま布布拵拵布布緒緒のの單單鞋鞋でで下下野野依依濃濃紙紙後後ををととかかりり口口りり

命いのちとと腕うでとと切きよよけけ危あや険う喧わ嘩なもも此こ方ちのの業わざ休やすままりり石いし
 りり人ひとああもも知しれれ故ゆ郷き上上近ちきき長なが我われ初はつのの里さとよよ序しよ川がわとと
 とと總そう一いつ酒しよ博はく奕やくのの場ば所しょのの賭か博はくとと長なが我われ初はつのの幸き務むとと
 高たか小こううけけてて女おんな房ぼう下した総そう考こう陸りくをを下した毛け少せう一いつ知しれれとと表あは
 彦ひこ道みち家やのの生あ揚ありり汝なのの危あや情うよよ惑まど溺おままてて別わか際ぎはをを重かさ
 ねねとと曉あきりり一いつ所ところとと連つれれとと銀ぎん壺ひやうよよ江え戸どをを拂はらつつとと上う総そう
 初はつ今いまままをを覆おつつとと賭か博はく業ぎやうのの化まのの皮かわがが露あ露れ下したのの定さだめめ一いつ
 毫あ想そがが尋たずねねととららずず然しかしし鬼き神じんよよ横よこををななしし連つ流れ入い情じやうよよ

累つらりのね人と云いきてか勝かつの教しやくらち視しやり一端いちたん整ととつ
 二ふた個ごが中ちゆう後ご令れい鬼おに心こころ由よし蛇へびいいかろろ貴かみ郎らう白しろ衣えあある
 如ごと何なにややるる若わ艱げん由よし厭いとつつ取と妻つまが心こころ中ちゆう何なに卒そつ惘ぼう結むすと思おも
 つつととかからられれとと莞わん爾に笑わらふふ幸きう秀しゆういいそのその了りょう算さんああるる本ほん
 妻さいいい離り縁えんままるるとととと着ま棄すいいせせぬぬとと密ひそ々々信しんふふ折しりり由よし何なにれ
 高たか家やのの主ぬし個ご島しまみみ希きいい子こ分ぶん共とも俱ぐたたちちゆゆりりささてて幸きう秀しゆう
 二ふた徳とくるるややりり先さき刺さしし旅りゆう宿しゆくよよ泣なせせ並ならぶぶかかのの仁にをを弟ていよよ
 妻さい細ことと淡たんとと重ちゆう右う劫けつ次じのの二ふた個ごがが疵きず傷やのの業わざ用もちをを當あたははしし金きん

二ふた雨あめとと渠みち等らよよ興きようへへ内うち海うみのの書しよ面めんよよ丸まる中ちゆう押おしせせたりりと
 取と出だせせ交かうたた一いち札さつとと幸きう秀しゆういい見みととままりりてて島しまみみ希きいいががそのその
 申まを裁さいのの名な殺ころととおおだだららひひ立た換かのの金かね負おとと返かへ却かへてて子こ分ぶん
 等らみみをを土つち産うみみありりとととと歳さい平へい次じのの黄わう白はくをを興きようへへつつをを取とひひ
 此こ家やよよ止と宿しゆくにに主ぬし個ごとと酒さけ破やぶ換かしし翌あした日ひ出で立た立たるるさんさんと
 ままるるよよ島しまみみ希きいいままりり希きいい二ふた挺ていのの弩くわ筋ぢんとと整ととへへおおたた
 幸きう秀しゆうおお務むとと勤きんめめてて家からら一いち分ぶんのの者ものよよ一いち里り取とりりのの
 道みちとと送おくららせせ別わかれれとと一いちがが高たか目め二ふた個ごへへ長なが我われ初はつよりり二ふた里り



島五郎口論の
中裁取来
証書幸
藏に見せる



程隔ち一俣み回とりける片山里なる幸翁が子
分獲実の権六が家より此家より獲を尚分
乗托け其身に一先長我が家の我家より戻りて留ち
中の何飲の用事を定むらむよ翌十一月の同國彩
握の十夜布より此おのし総下総兩國の老若男女
群集あり殊も近郷坐敷ある觀世音の境内まで系
備人の引毛まきまき雑沓大方ありさうくぐ之尺露
店の際物商人あせくまて張並び覗き機関銀物小

や泥路連糸文紋下昨僕賣或は博徒居合技人の
暇と抜く拘換勇賊直の内より大樹の蔭小山の禁よ
盆蓮と布役けたる野田侍乗標満一布とバ丁半あり
要業仲弓の群と分ちく貸元壺振立番へ布端の
車軸長服長袴袴者や礼節人と威を獲衛の防だど
知ると彼水滸傳の樂山泊よ矢剛地慾の嘉嘉傑が種ふ
も初やと想像せり此一般の盆蓮より寺口と号ひ丁
半の勝負と競ふ相方が賭たる金額の二十一の分

を死しまさとと函はなみみ収おさめめ合あししててああまま張は得とるる者ものへへ刑せいちち長なが
 我われ船ふねのの幸さい彦ひこなるるがが一ひと昨きのう年としのの十じゅう夜やののどどりり佐さ少しう五ご
 富とみのの徳とくみみ弟あにととてて一ひと所ところ不ふ任にんのの悪あく漢かんがが全ぜん船ふね下しもとと一ひと個こ
 連つらりりてて富とみ新あらた堀ほりのの布ぬいよよ来きりり傾かへ元もと幸さい彦ひこよよ金かねとと信しんん
 とと強たかてて迫せまりりてて賭か博ぱく場ばうとと札しやく坊ぱうせせ一ひとくく六む幸さい彦ひこがが子こ分ぶん号ごう
 一ひと回かい寄よ集じふひひ彼かの然ぜんみみ弟あにとと切き殺ころしし於お下しものの収おさめめとと逃にげ退たい
 ぞぞけけ一ひとがが此この事こと平ひらくくもも願ねがふふまま又またええそのその罪つみ幸さい彦ひこ一ひと己おのれ
 よよ帰かへりり虚うつくくとと救たす郷きやうよよまままま忽まちち捕とらへへららとと且かつとと推おしし

暫しばらく時とき江え戸どよよ潜ひそ伏かく居かてて二ふた年とし後のちりりとと過すしし最さいをを札しやく
 ののささめめ一ひと頃ころとと富とみ年としのの十じゅう夜やのの賭か博ぱく場ばうとと目め的てきよよ救たす郷きやうよよ
 帰かへりりままうう一ひとへへ其その身みのの果はとと知しれれたたりり然しかババ又また幸さい彦ひこ
 とと我われ土つち地ぢををぐぐ法は度どをを破やぶるる賭か博ぱくのの場ばう所ところ也なり急いそ旅たび
 装まひひよよ大おほ刀やいばががああとと一ひとのの子こ分ぶん掃はき実じつのの槍やり六む初はつめめ幸さい彦ひこ
 のの久ひさ次し一ひとのの富とみ弟あに者もの名などど何なにれれもも名なののああるる長なが銀ぎん
 差さとと括くわ袴はかまよよぶぶつつ裂さ羽は織おり大おほ小こ佩ひたるる武ぶ士し打う拵ぢうへへ富とみ
 附つけけ江え戸ど神かみ田でかかままがが池いよよ真ま彩さい流りゆうのの擊げ劔けん脚きゃく千ち葉え周しゅう作さく

が之男同苗圃之巫亂友と名乗一威一連一
 擬ひ者と電毒お務が多と連連かの新塚の十夜一
 来り我貸元の賭場を巡りて盆蓮毒よ眼と配り
 非常と防ぐ偽への指揮の最いうめ一たおしもわれ
 一叢茂る喪落よ喧嘩とと共く声噴裁と柱六
 久次以希者之個等しく其場とさうてをゆくち院の
 背後も再び元人の叫ぶ声へ他よ喧嘩の起りしるん
 と幸霧へ周之巫よお務と付託と躬ら其処よ仍んと

まる林の蔭より殺多の捕丁を幸霧が茶後ととり共
 上意くと吸ちるよぞさてへ希料の氷気が揺りて我と
 捕縛るの汁異るるう去るう適るう丈ハ通れてえん
 と左右よ組付く捕丁と身と接しして突速速速け腰
 の一刀抜より疾く水車のごとく打揮る突速電光石火
 の疾業よりらひらひらひらて捕丁が志を一瞬滞ふをるよ
 一方の魚路と開た米丁雁り一筋の小路とたへき霧の
 途中機園の畏る所足踏込と思へせ撞と例止伏一起ん

とまると起しかこもまむま右左みぎひだりの救藤すけふぢより七八せち個この捕丁とらての
 伏勢おせ忽ちたちそとそとに逃りにげ出い出で重おも重おもあつて幸務かうぎとと分わかく来きま
 束縛しゆわくつつ落おたるた刀やいばを拾ひろひひ糸いと緒およよ収とめてめ囚人めしうと引ひ立たええの市いち場ば
 引返ひがえまま此所このところ幸務かうぎがが分わかるる権六ごんろく之の次つぎ江戶えど者もの之の個こ
 もも疾はやしし捕縛とらわ是こゝ今いま幸務かうぎの捕とらはは目め下さままおお入いと
 纏まとやりり互たが互たが面おもてと見み合あひひてて無む事じの眼まなこ血ちをを一ひとるるのの亦また
 陰かげ謀ぼうゆるゆるりり里さと

鋸山玉石異訓初編卷上終

010190513039

